

## パキスタンの英語事情と学校英語教科書

林 田 享 子

### Language Policy and School English Textbooks in Pakistan

Kyoko Hayashida

#### Abstract

This paper reviews language policy in Pakistan, focusing on the status of English as an official language, and examines how it is reflected in the English textbooks used in schools. The final goal of English education in Pakistan is to acquire English competence for its official use. The textbooks are organized along this line. However, there are some differences in topics between those from Grade 6 to 10 and those on the higher secondary level. These differences reflect both the present structure of the society and the position of English in contemporary Pakistan.

**Key words: English, textbooks, schools, Pakistan**

#### 1. はじめに

パキスタンでは、日本と同様に、英語はほとんどの住民の母語ではない。しかし、英語は、公用語として国内のコミュニケーションにおいて重要な役割を果たしている。住民の母語ではない英語が国内で使用される国の英語教科書と、国内で使用されず、外国語として英語教育を行っている国の英語教科書では、内容の取り扱いが相違することが予想される。本稿では、パキスタンのシンド州を一例として、言語政策を中心とする国内の言語事情が、実際に、学校英語教科書の内容をどのように左右しているかを確認する。

#### 2. 国内における英語使用

##### 2.1. 公用語としての英語

第2次大戦後、アジアやアフリカでは、イギリスを含むヨーロッパ諸国の植民地から数多くの独立国が生まれた。それらの国々では、国内で複数の言語が使用されているため、国に

よって、国内の統一を容易にする目的で国語や公用語を定めている。その場合の多くは、地域固有の言語を国語として、旧支配国の言語を唯一の公用語、あるいは複数の公用語の一つにしている。パキスタンでは、国語はウルドゥー語、公用語は英語である。パキスタンにおける公用語としての英語使用の歴史は、1947年に旧イギリス植民地のインド領から分離独立を達成して以降50余年、インド領の時代も加えれば、それ以上の期間に及ぶ。

しかし、公用語であるからといって、その言語を使用する人口が多いわけではない。独立から4年後の1951年に英語が幾分でも使える人口は、全体の3.12%に過ぎない(Musa 68)。その後の人口比は定かではない。CIAの*The World Fact book 2000*は、国内の言語別人口比を記した箇所では、英語に関しては人口比の代わりに「パキスタンのエリートとほとんどの政府機関の公用語そして共通語」という説明を載せている。また、パキスタンの商工会議所公認の紹介文は、英語を「教育を受けた人々が広範囲で使用する言語」と記している(Space and Time Ltd.)。

## 2.2. ウルドゥー語政策と英語使用

パキスタンにおける英語使用は、さらに、国語であるウルドゥー語との関連から捉える必要がある。独立後、パキスタンは、インドと同様、国内の中枢における使用言語、つまり、公用語を旧支配国の言語である英語から自国の言語に、100パーセント移行させる政策を表明した(Musa; Rahman<sup>4</sup>)。英語に取って代わるべき言語であると考えられたのがウルドゥー語である。しかし、英語からウルドゥー語への移行は現在まで達成されていない。

憲法上、英語からウルドゥー語への移行期間に関する記述は、再度、修正されている(Britannica 397)。1956年憲法は、公用語として英語を使用する期間を20年間と定めた。しかし、1962年憲法ではその期間が無期限になっている。さらに、東パキスタンが独立した後の1973年憲法は、ウルドゥー語を唯一の国語と定め、公用語を英語からウルドゥー語に移行させること、また、その移行期間は15年間を目安とすることを記している(Nakhoda)。1979年には国語局が設置され、ウルドゥー語の使用範囲を公用語の範囲にまで拡大する方針で辞書作成等の活動が続けられている。しかし、73年憲法が記している15年間をはるかに超えた現在、英語は相変わらず公用語である。

連邦政府のウルドゥー語の選択は、旧インド領の分離独立に至る対立のベースになった宗教と大いに関係がある。旧インド領の分離独立は、当時の社会問題が主として宗教の相違に集約されることから、宗教の旗印の下に二手に分かれ、分離なしでは独立が達成できない状況に至った結果である。両者が旗印に掲げた宗教は、ヒンズー教とイスラム教である。そのそれぞれの経典と最も関わりが深い言語がヒンディー語とウルドゥー語である。

ヒンディー語とウルドゥー語は、発音と文法が非常に似通っているが、表記文字と語彙が異なる。ヒンディー語はヒンズー教の経典文字であるサンスクリット語の表記文字(Devanagali)を用い、サンスクリット語から多数の語彙を取り入れている。一方、ウルドゥー語の

表記には、イスラム教の経典文字であるアラビア語がペルシア語とミックスした文字を用い、両言語から多数の語彙を取り入れている。したがって、インドのヒンズー教とヒンディー語に対して、ウルドゥー語は、イスラム国家を象徴する言語であり、パキスタンに相応しい言語であると考えられたのである。当然ながら、政府の中枢の官僚と軍部にはウルドゥー語を使用できる者が多かった。

しかし、独立後、ウルドゥー語は必ずしも国内を統一する言語にはなり得えなかった。ウルドゥー語を実際に国内の共通語にしようとする連邦の政策が、ウルドゥー語以外の言語話者の反発を招く原因になっていったからである (Musa; Rahman<sup>a</sup>)。たとえば、西北辺境州では、パシュト語話者が、独立前からウルドゥー語を国語にする考えに反対の動きを見せ、シンド州では、シンディー語話者がウルドゥー語の使用範囲を学校教育等の公の領域にまで拡大する連邦の政策に抗議運動を展開した。また、東パキスタンのベンガル語話者と連邦政府との抗争は最も極端なケースで、前者が遂には分離して独立国を成立させた。

1951年当時、ベンガル語話者が全人口に占める割合は、東パキスタン：98.42%、西パキスタン：0.02%である (Musa 67)。ベンガル語話者は、居住分布が東パキスタンに集中しており、東パキスタンの全人口のほとんどを占めた。したがって、連邦の政策に対する反対も強く、1952年には、連邦政府は死傷者を出す武力行使の鎮圧を行った。さらに、1956年には、連邦政府は、憲法で国語をウルドゥー語とベンガル語と定めたが、一方ではベンガル語をアラビア語文字で表記させる政策を施行した。その結果、両者の溝はますます深まり、1971年に東パキスタンは独立国バングラデシュを成立させた。

1951年の母語別人口比は、パキスタン全土では、ウルドゥー語：3.27%；英語：0.02%であり、地域別では、東パキスタンがウルドゥー語：0.64%；英語：0.01%、西パキスタンがウルドゥー語：7.05%；英語：0.03%である (Musa 67)。両言語の人口比はともに僅かであるが、英語の人口比はウルドゥー語よりさら小さい。その英語が公用語としての地位を維持し続けてきたのは、一つには、上述のように、元来、言語話者が少ないウルドゥー語を推進する連邦の政策が、他の言語話者の抵抗に遭ったからである。

さらに、Rahman は、政権を握ったグループ自身が英語話者であり、ウルドゥー語政策を推進する一方で、英語話者の特権を維持するシステムを温存してきた状況に言及している (Rahman<sup>b</sup>)。たとえば、1979年頃からすべての学校の授業をウルドゥー語で行うという案がエリート層の圧力で廃案になっている。また、国の中枢を担う軍の養成学校は、英語で授業を行っており、政府が学校の授業をウルドゥー語で行う方針を強行に推進した時期でも、例外の扱いを受けていたという。

1994年の母語別人口比は、パンジャービー語：48%、シンディー語：12%、シライキ語：10%、パシュト語：8%、ウルドゥー語：8%、バロチー語：3%、ヒンドコ語：2%、ブラフイー語：1%、英語・その他：8%である (Library of Congress)。ウルドゥー語の

人口比は、1951年当時より増加しているが、その増加に要した年数と東パキスタンの離脱後の割には僅かである。しかし、共通語としてウルドゥー語あるいは英語を使用する、もしくは、使用できる人口比は、はるかに多い可能性がある。その人口比と重要に関わっているのが、学校での第2言語教育である。実際、パンジャーブ人や教育のある人の中では、第2言語としてウルドゥー語の習得は珍しくないようである。

### 3. 学校教育<sup>(1)</sup>

#### 3.1. 行政

連邦教育省 (Federal Ministry of Education) が全体の方針を決定し、州教育省 (Provincial education department) がその方針に沿って具体的な内容を決定する。連邦教育省は、州教育省に対して、財政面での援助、州間の調整、助言を行う。

教育行政単位は、州を分割した地域 (region)、地域をさらに分割した地区 (district) に分かれ、州教育省の下に、初等学校は地区単位、中等学校は地域単位で教育を実施している。高等教育機関のカレッジと大学 (Universities) も、州の管轄下にある。カレッジの運営は初等と中等とは別の部門が担当し、大学の運営は州知事が任命した理事会が独自に行っている。

連邦教育省は、1955年以来、教育5ヵ年計画を実施している。当初から、識字率の低さが問題視され、初等教育の普及と義務教育化が主要目標の一つである。しかし、1995年の識字率は依然として低い(CIA)。15歳以上の年齢層で、全人口の37.8%、男性人口の50%、女性人口の24.4%である。1993-94年のユネスコ報告書によれば、5ヵ年計画の達成度は、常に、目標を大幅に下回っている。同報告書は、その原因として、財政上の実際の援助額が予定した額を大幅に下回ってきたこと、また、政情の不安定を挙げている。

連邦教育省は、1998年に、2010年を達成年度とする教育方針 (National Education Policy) を発表し、2004年までに義務教育法の公布と実施を行いたい意向を明らかにしている。教育方針の目標は、第1にイスラムの社会秩序を強化することにある。次に、識字率のアップを意図した目標として、初等教育の普及、中途退学者の減少、女性の教育の向上、都市と地方の格差の除去、私立学校の奨励、学校外教育の充実など、また、教育の質の向上を意図した目標として、カリキュラムと教科書の近代化、教師の質と地位の向上、教育施設の充実などが挙げられている。

#### 3.2. 学校制度

徐々に、3段階の新制度へ移行する方向にある。シンド州、バルーチスタン州、連邦首府は、現在、新制度への移行の可能性を模索中であるという。表1は、新旧の制度を簡略化して対照させた表である。なお、この表には示していないが、パキスタンでは、伝統的なイスラムの教育機関が近代的な学校教育機関と共存し、独自の教育を行っている。

学校教育は、Primary, Middle, Secondary, Higher secondary (Intermediate), University の5レベルに分かれている<sup>(2)</sup>。Higher secondary の教育は、カレッジという名称の学校で行われている。従来は、Primary が初等教育、Middle と Secondary が中等教育、Higher secondary と University が高等教育と見なされていたが、新制度では、Middle が初等教育、Higher secondary が中等教育に含まれる。

Secondary と Higher secondary は、公の試験を実施している。この試験は、州教育省の管轄下にある両レベルに共通の委員会が担当し、合格者には修了証を授与している (IEE 4269)<sup>(3)</sup>。

Higher secondary の修了は、University 入学の必要条件である。University では、入学後2年間の学業を修了した時点で学士号、4年間では修士号が取得できる (以降、パキスタンの University を大学と記す)。

カリキュラムは州が立案する。連邦教育省のカリキュラム・教科書局は、州のカリキュラム局を通じて各州の調整を行う。授業科目は、全国的に8学年まで共通である。教科書作成は、州の教科書委員会が任命した作成者が行っている (IEE 4269)。ただし、高等教育機関では、科学技術の領域で、通常、輸入教科書を用いている。授業日数と授業時間の推定全国平均値は、次のとおりである。

	初等	中等
年	780時間/年, 180—190日	900時間
週	26時間	30時間
	5日間は終日授業, 1日は半日授業	初等と同じ
1単位時間	40分	50分

注：祭日、試験・課外活動の時間は含まない

教授言語は、一般に、初等教育：ウルドゥー語あるいは地域の言語；中等教育 (Secondary, Higher secondary)：ウルドゥー語；高等教育：英語，である。言語科目は、初等教育では、第1言語と第2言語の科目がある。第1言語として、州の言語を科目にすることができる。英語は、Middle では、初年度の第6学年から必修であり、授業時間数は週に6単位時間である。中等教育の Secondary では、ウルドゥー語が必修であり、週に4.6単位時間の授業が行われる。言語科目の選択肢として、アラビア語やペルシア語を初めとするパキスタン国内で使用される言語とトルコ語、中国語、日本語、ロシア語、フランス語、ドイツ語、スペイ

表1. パキスタンの学校制度

年齢	学年	新	旧	レベル
↑	↑	↑	↑	↑
17	13	高等	高等	University
16	12	中等	[中 高 レ ベル]	(College)
15	11			Higher secondary
14	10	中等	中等	Secondary
13	9			
12	8			
11	7	初等	初等	Middle
10	6			
9	5			
8	4	初等	初等	Primary
7	3			
6	2			
5	1	就学前教育		

ン語が挙げられている。Higher secondary では、ウルドゥー語と英語が必修である。

教員資格の条件は、学年別に、次のとおりである。初等教育の教員の場合、実際には総数の％がその条件を満たしていないという。

対象学年	教員資格の条件
第1～5学年：	10年間の学校教育+1年間の教員養成プログラム
第6～8学年：	12年間の学校教育+1年間の教員養成プログラム
第9学年以上：	学士号以上の学位を取得+1～3年間の教員養成プログラム

就学率は、Primary：71.3%，Middle：45.8%；Secondary：30.8%，Higher Secondary：11%，Universities：3%未満，である。中途退学する者が多く、初等学校では最終学年までに入学者の約半数が中途退学しているという。

### 3.3. シンド州の実施形態

シンド州には義務教育制度はない。学校には、Primary の5年間だけの学校と Primary から Secondary までの10年間の学校、カレッジ、大学がある。Primary だけの学校を終了した者は、希望すれば10年間の学校の第6学年に編入可能である。

Secondary の第9学年と第10学年には統一試験がある。試験科目はウルドゥー語、英語、Islamiyat（イスラム教育の科目）である。また、カレッジの第11学年では第12学年への進級試験が実施されている。

学年暦は4月開始で、4月～10月と11月～3月の2学期制である。1学期は休・祭日も含め約24週間、1単位授業時間は40分である。クラス・サイズは、科目が必修か選択かによって異なる。情報提供校の国立男子校では、1学年1クラス、1クラス50人の編成である。

英語科目は、導入学年が第6学年であり、第6学年では必修である。英語の授業時間数は、年間232～235単位時間、週に4単位時間、時には6～7単位時間である。視聴覚機器は、科学コースでラボの設備がある場合を除き、使用されていない。また、英語のネイティブ教員は採用していない。上述の国立男子校では、教授言語がウルドゥー語で、外国語科目は無い。カレッジの教授言語は英語である。

## 4. シンド州の学校英語教科書の特徴

### 4.1. 統一教科書

シンド州の学校で用いられている英語教科書は、第6学年から第12学年まで統一教科書である。その教科書名と構成は次のとおりである（以後、学年を教育レベルの頭文字M、S、Iと学年の数字を組み合わせて表記する）。

教科書作成は、Mレベルの教育委員会とSとIの両レベルに共通の教育委員会の下で、シンド州教科書委員会（Sindh Textbook Board, Jamshoro）が行っている。S10の教科書はパン

学年	教科書名	頁数	課数	サイズ*
6	Middle Stage ENGLISH Book-1	81	5(5 parts)+3R	18×23cm
7	Middle Stage ENGLISH Book-2	58	5(5 parts)+3R	▲ ↓
8	Middle Stage ENGLISH Book III	133	20	
9	Secondary Stage ENGLISH Book One	110	20	↓ 14×21cm
10	Secondary Stage ENGLISH Book Two	144	26	
11	Intermediate ENGLISH Book One	207	14+2R	
12	Intermediate ENGLISH Book Two	151	10	

注：\*サイズは概数値=実測値±0.5cm, Rは巻末のリーディング教材

発行年 M6：2000年2月, M7：1998年2月, M8とS9：1999年2月, S10：1999年3月,

I11：1997年7月, I12：1997年7月

ジャープ教科書委員会の教材を一部借用しており, I11の教科書はイギリスの教科書を大幅に改訂した教科書である。また, S10以上の教科書の著者もしくは改訂者グループには, 英語のネイティブ・スピーカーが各1名含まれている。

なお, 上述の教科書に加え, 文法の本とリーディング用の本が用いられている。文法の本は, 文法説明と作文と訳の問題を含む練習問題から成り, M6とM7, M8, S9とS10, の別で, 3分冊に分かれている。リーディング用の本は, 詩, 小説, 戯曲の別で各1冊, 合計3分冊がIレベルで用いられている。

#### 4.2. 習得目標の言語技能

教科書が重視する言語技能の種類が, M8から変わる。M6とM7では, 各課が「聞く」, 「話す」, 「読む」, 「書く」の4技能の総合的な習得を意図した構成である。しかし, M8以降は, 全課の本文にリーディング教材を用いている。

詩が登場するのもM8からである。その数はSレベルの最終学年まで, M8：20課中5課, S9：20課中6課, S10：26課中13課, と次第に増加する。しかし, Iレベルでは, 詩を全く取り上げていない。本文の頁数は, 詩を除くと, M8：3～4頁, S9：2 $\frac{1}{4}$ 頁, S10：3～4頁, I11：2～9頁, I12：2～14頁である。Iレベルでは, 全体の課数がM8とSレベルの半分ぐらいであるが, 一つの読み物の長さがかかなり長いものが含まれる。S10とI12の練習問題には, 英文をウルドゥー語もしくはシンディー語に訳す問題が含まれている。S10ではこの問題を含む課は僅かであり, 訳も段落単位である。I12では, 全課にわたって複数の単文を訳す問題を載せ, 最後の課では要約問題と兼ねて段落文の訳を要求している。

「文章を書く」技能の習得は, Sレベルから, 練習問題の箇所ですべて格的に開始する。Sレベルでは, まず, 段落文を書く練習をする。1段落の長さは, S9：5文, S10：8～10文である。S9まで, 本文の内容についての質問に多肢選択あるいは穴埋め方式で答えさせているが, 段落文を書く練習を開始した翌年のS10から, 文で答えさせている。次に, Iレベルでは, 段落文ではなく, まとまった文章を書く練習をする。文章の長さは, I11：250～

400語, I 12:150~200語あるいは350~400語である。I 12では, さらに, 第2課から文章を読んで要約文を書く練習が加わる。

#### 4.3. 話題

「国内の話題」, 「国外／世界的視点の話題」, 「科学・テクノロジー」, 「言語」の範疇別に取り扱いの特徴を述べる。「国内の話題」と「国外／世界視点的話題」の範疇は, 部分的に「科学・テクノロジー」あるいは「言語」の範疇と重複する。その両者の範疇に該当する話題は, 後者として扱う。

##### 4.3.1. 国内の話題

###### (1) レベル／学年別の傾向

Mレベルの最初の2学年では, パキスタン固有の文化を話題にしている課は僅かである。M6では付録のリーディング教材の一つ, また, M7では第5課の暗唱文のパートと付録のリーディング教材の一つが取り上げている。その他は, 背景をパキスタン国内に設定し, 学校生活や買い物等の日常的な話題を取り上げている。練習問題も含め, 登場する人物と地名のほとんどがパキスタン人とパキスタンの地名である。M6では第2課のパート5がJackを, また, 第5課のパート3が手紙文の宛名にイギリスの人名と地名を用いているに過ぎない。

M8から海外の作品が登場する一方, M8からSレベルの最終学年まで, パキスタン固有の文化を話題にする課が多い。その数は, 詩を除くと, M8:15課中10課, S9:14課中12課, S10:13課中9課である。また, 練習問題に登場する人名と地名のほとんどが, パキスタンの人名と地名である。国外の人名と地名は, M8がJack, Yuri Gagarin / Russian, Neil Armstrong / American, Tomを, S9がLondonをそれぞれ1箇所を用いているに過ぎない。

Iレベルでは, パキスタン固有の文化を取り上げる課数が急減する。本文中では, I11の二つの課とI12の一つの課が取り上げているに過ぎない。ただし, I12では, 全9課中3課の要約練習問題が, この話題の短文を用いている。練習問題には国外の人名, 地名が多数登場する。

###### (2) パキスタン固有の文化

パキスタン固有の話題で最も多いのはイスラム国家の建設もしくは発展に関連した話題である。歴史, 歴史上の人物, イスラム法の概念, 女性運動家, 国民の義務, モデル農場, 教育制度の一部を形成するスカウティング等を取り上げている。この種の話題はM8からIレベルの最終学年まで登場する。その数は, M8とS9が特に多い。

課によっては, どの文化にも共通する話題を, 国家形成の一要素として取り上げている。たとえば, M8の第19課は, 教師が生徒に将来の仕事について問いかける形式の対話で, その仕事为国家のためになる仕事であるかどうかを問題にしている。

次に, イスラム教に限定した話題である。M7に祈りのことばが登場し, M8とS10は,



それぞれ二つの課がイスラムで尊ばれる勤勉さを話題にしている。また、S 9が予言者の教え、聖人、現在重視の世界観を、S 10がイスラム世界では寛容が人を治めるという話、I 11はイスラムの祭日を取り上げている。この種の話題は、M 8からSレベルの最終学年まで、比較的によくの課が取り上げている。

この話題に関連して、イスラム社会における望ましい人間像の一例が提示されている。S 9の第2課は、イスラムの1聖人を取り上げ、聖人として高く評価する一方、詩や音楽に優れた人物であったことに言及している。話題の範疇は相違するが、M 7の第3課も、過去の偉大なイスラムの学者が多方面で秀でていたことを説明している。その実例として登場する科学者が専門外で優れている領域は、やはり詩と音楽である。M 8からSレベルの最終学年まで、教科書がかなりの数の詩を取り上げているのは、イスラム社会において詩の素養がある人間が望ましいと考えられているからではないだろうか<sup>4)</sup>。

その他の話題は、パキスタン固有の日常生活の文化である。山、都市、村の生活、村祭り、地域別慣習、パーティーの準備等が話題になっている。イスラム関連の話題と比べると、この種の話題を取り上げる課は僅かである。英語学習を開始した当初の3年間は、各学年で1課が取り上げているに過ぎない。

#### 4.3.2. 国外／世界的視点の話題

詩以外のリーディング教材でこの話題を扱う課は、次に示すように僅かである。S 10のL 15ではナイジェリアの村の生活、また、I 11のL 7の手紙文ではイギリスとパキスタンの祭日が話題である。

①世界協力・障害者・平和・環境問題等	②外国の文化
M7 U4.2 : Our Earth	
M8 [L3 : Some Curious Creatures], L10 : The Nobel Prize	L 17 : Eskimos
S 9 L5 : Helen Keller, [L14 : Nursing]	
S 10 [L3 : Professions], [L13 : Shopping]	L 6 : King Faisal, L15 : An African Village
I 11 L3 : The United Nations	L 7 : Letters, L9 : By Car Across Europe
I 12 L4*, L 5 The World As I See It (by Einstein), L10*	L 6*

注： [ ]は、その課の本文の内容に関連して僅かに言及している場合；Uは unit；Lは lesson

\*印は、要約練習問題中の短文

I 12 L 4 : 第2次大戦後のアジアの独立に関連して、国と個人の自由の重要性を説く

L 6 : イギリスのパブリック図書館の利用法を説明

L 10 : パキスタン国内で灌漑が新たな問題を引き起こしている状況を説明

この話題を正面から取り上げている課数が全体の課数に占める割合は、Iレベルに比べ、MレベルとSレベルは僅かである。世界的視点の話題を1学年が全く取り上げず、外国の文化は2学年が全く話題にしていな。また、S 10のL 6は、サウジ・アラビアの発展に貢献した人物を高く評価した内容であるが、その人物を話題にしているのは、サウジ・アラビア

がイスラム国家であることに因る。

本文の内容に関連して僅かに言及している話題は、M8のL3が、Kiwiの箇所で絶滅に瀕した動物の問題、また、Sレベルでは、Nursingがナイチンゲールの世界的功績と略歴、Professionsが漁業の箇所で産業公害、Shoppingが買い物袋の公害問題である。Sレベルの場合、どの話題もパキスタン国内に焦点を置いた取り上げ方をしている。

#### 4.3.3. 科学・テクノロジー

この話題を取り上げる課数が全体の課数に占める割合は、MレベルとSレベルでは僅かであり、Iレベルで増加する。その内容は、以下のとおりである。

M7	U3.2: Islam and Science*
M8	L14: The Moon, L20 Modern Inventions
S9	L20: The Guddu Barrage* (パキスタン国内の堤防の重要性)
S10	L3: Professions(b)Fishing*, L22: Mending a puncture
I11	L5: The Miracle of Radio, L6: Air Travel, L11: Science and Scientists, L12: Science and Society
I12	L2: Reflection on the Re-Awakening East, L8: Space Ship One (SF), [L8*] L9: An Astronomer's View of the Universe, [L9*], L10: Life in the Universe, [L10*]

注: \*印は国内に焦点を置いた内容, UはUnit, LはLesson

[ ]は要約問題の短文

L8: 宇宙科学にかかる膨大な費用の正当化, L9: 星について

L10: 人間と機械の同一視の問題, 科学的問題と政治・社会問題の相違,

パキスタンに必要な科学は創造的な科学, パキスタンにおける視覚メディアの有用性

MレベルとSレベルでは、この話題を取り上げる場合、国内に焦点を置く傾向にある。一方、Iレベルでは、I11のL11やI12のL10は抽象的に科学もしくは科学理論を取り上げ、I12では最後の課の要約問題が、パキスタン国内に焦点を置いた取り上げ方をしている。しかし、全体的に、欧米における科学の発展そのものを話題にする課が多い。

Iレベルでは、科学の話題の増加と平行して、本文外の文法のまとめや練習問題に欧米を中心とする世界の人名と地名が多数登場する。ただし、I11とI12では用い方が異なる。I11は、イギリスの教科書の改訂版であるためか、欧米の人名と地名がほとんどであり、中でもイギリスの人名と地名が多い。一方、I12はパキスタンの人名と地名を併用し、パキスタンの人名と地名の方を、幾分、多く用いる傾向にある。

#### 4.3.4. 言語

この話題は、Iレベルだけが取り上げている。I11では、L10が英語の歴史を話題にしている。しかし、英語がパキスタンを含め世界へ波及していった歴史やイギリス国外で使用されるアメリカ英語やオーストラリア英語等の英語の種類には言及していない。言語一般の話題は、I11のL14が沈黙を取り上げ、沈黙が人間にとっていかに不自然なものであるかを説明している。また、I12では、第7課の要約問題の短文がスピーチの重要性と言語音の発声

の仕組みを話題にしている。

また、課によって、登場人物の多言語能力に言及している。M8のL10はノーベルが英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語、スウェーデン語に堪能であったこと、また、L13はシンド州の片田舎出身の学者 Alama Daudpota が、シンディー語、英語、アラビア語、ペルシア語で本を書いていることに触れている。

英語以外の言語名は、文法のまとめや練習問題にも稀にしか登場しない。S10とI12には英語からウルドゥー語、あるいは、シンディー語に訳す問題が含まれている。その他では、S10がウルドゥー語を用いている。また、I11はアラビア語とヨーロッパの言語を用い、ヨーロッパの言語の中ではフランス語とスペイン語を用いる頻度が高い。

## 5. まとめ

パキスタン・シンド州における英語教科書の構成は、第8学年から大きく変わる。英語学習が開始する第6学年と翌年の第7学年の教科書は、4言語技能全ての習得を配慮した構成であるが、3年目の第8学年から、もっぱら「読む」、「書く」の技能習得を意図した構成に変わり、「聞く」、「話す」の技能にはスペースを割いていない。

しかし、第8学年以降の教科書は、必ずしも「聞く」、「話す」の技能を軽視しているわけではない。第6学年以上の教師は、Iレベル以上の教育を受けてきた者たちである。シンド州ではIレベルの教育機関が英語で授業を行っているので、教師は、少なくとも2年間、英語以外の語学科目を除く全ての授業を英語で受けている。「聞く」、「話す」の技能は、学習者が第6学年と第7学年で基本的なレベルを習得していれば、第8学年以降は、教師が授業で英語を使いながら指導できる状況にある。

また、パキスタンの場合、習得目標の英語力は、最終的には国内で公用語として駆使できるだけの高いレベルの英語力である。第8学年以降の教科書が、本文でもっぱらリーディング教材を取り上げ、練習問題の箇所、文法、作文、語い、語法にかなりのスペースを割いているのは、そのレベルの英語力の習得を意図しているからであろう。

一方、教科書が取り上げる話題に関しては、M、S、Iのどのレベルもイスラム教とイスラム国家の形成に関連した話題を取り上げている。これは、連邦政府がイスラム社会の秩序の形成と確立を教育の主目標に掲げていることと対応する。しかし、その他の話題に関しては、MとSの両レベルの取り上げ方とIレベルの取り上げ方に、異なった傾向が見られる。

MレベルとSレベルの英語学習は、国内における英語使用を前提とする。取り上げる話題は国内の話題がほとんどである。Mレベルの第6学年と第7学年は、基本的な英語力の習得が優先事項のためか、背景の場面をパキスタン国内においた日常的な話題が多い。また、第8学年からSレベルの最終学年では、パキスタン固有の文化が話題として多数登場する。中

でも、イスラム教やイスラム国家の形成に関連した話題が多い。村の生活のような日常生活の話題は僅かである。MレベルとSレベルでは、練習問題に登場する人物と地名もパキスタン人とパキスタンの地名がほとんどである。

Iレベルでは、イスラム教やイスラム国家の形成に関連した話題は、各学年が一つか二つ取り上げている。しかし、このレベルでは、世界的視点の話題や科学・テクノロジーの話題が急増する。また、外国の人名や地名も、本文と練習問題の両方に多数登場する。

MとSの両レベルとIレベルにおける話題の取り上げ方の相違は、パキスタンの社会構造を反映している。Iレベルの学習者は、将来、国の中核あるいは国外に関連した仕事に従事する可能性が高いグループである。したがって、その学習者グループに応じた話題が取り上げられているのであろう。ただし、Iレベルでは、海外の話題が多いが、特定の国や文化に関心が向けられているわけではない。この話題はIレベルでも僅かしか取り上げていない。また、Iレベルでは英語の歴史を話題にしているが、英語が世界に波及した歴史の部分は欠落しており、英語を世界共通語として捉える視点も見られない。これは、Iレベルの英語学習もまた、国内における英語使用を前提にしているからであろう。

連邦政府は、イスラム社会の秩序の形成と確立をねらいとする教育を意図している。その政策は英語教科書に如実に表れている。その政策において、ウルドゥー語は重要な位置を占め、学校教育の教授言語にもなっている。一方、学校教育では、英語を国内の公用語とする英語学習が行われており、高等教育機関では英語が教授言語である。また、就学率は、英語学習が開始する教育レベルでは5割以下であり、カレッジのレベルでは1割強にまで減少する。つまり、学校制度内で現状を再生産するシステムが依然として存続しているのである。公用語が英語からウルドゥー語に移行する可能性は、その状況が続く限り、甚だしく低いと言えよう。

## 謝辞

シンド州の教科書は、カラチ市在住の高橋明氏の協力を得て入手した。また、同州の教育制度に関する情報は、高橋氏の勤務先のスタッフ Mohammed Shajahn 氏の協力を得て、現地の Government Boys Secondary School (Model Colony, Karachi) から入手した。お二人と情報提供校の関係者の方に心から感謝いたします。

## 注

- (1) 3.1.と3.2.は、文中に出典を明記しない限り、UNESCOの *World data on education: Profiles of national education systems* を資料とする。また、3.3.は、1999年10月に、シンド州カラチ市の Government Boys

Secondary School, Model Colony から入手した情報に基づく。

- (2) Primary, Middle, Secondary, Higher secondary (Intermediate) の4つの名称は、原語では stage を指示する名称である。初等、中等、高等の「段階」と区別するため、ここでは「レベル」という訳語を用いた。
- (3) IEE によれば、試験は第8学年、第10学年、第12学年に実施される。しかし、UNESCO: IBE は、実施されるレベルだけを記している。パキスタンは連邦制であり、州間で相違することが予想されるので、ここでは学年の特定を避けた。
- (4) M8 から登場する詩のほとんどは、英語圏のイギリス、アメリカ、アイルランドの作品である。僅かに、S9 の1課がドイツ系パキスタン人の作品を、また、S10 の1課がムーア人の作品を取り上げている。

## 引用文献

### 雑誌

- Musa, Monsur. "Politics of language planning in Pakistan and the birth of a new state." *International Journal of the Sociology of Language* 118(1996): 63-80.
- Rahman, Tariq<sup>a</sup>. "Language Policy in Pakistan." *Ethnic Studies Report* Vol. XV.1(1996): 74-98.
- Rahman, Tariq<sup>b</sup>. "The Urdu-English Controversy in Pakistan." *Modern Asian Studies* 31.1(1997): 177-207.

### 百科事典

- International Encyclopedia of Education* [IEE]. 2nd ed. Ed. T. Neville Postlethwaite and Torsten Husen. Oxford: Pergamon, 1994.
- New Encyclopaedia Britannica* [NEB]. 15th ed. Vol.25. Chicago: Encyclopaedia Britannica, Inc., 1997.

### インターネット

- Central Intelligence Agency [CIA]. "Pakistan." *The World Factbook 2000*. 24 August 2000.
- Library of Congress. "Pakistan: Linguistic and Ethnic Groups." Data as of April 1994. *Country Studies/ Area Handbooks Program*. 8 May 2000.
- Nakhoda, Shehzaad and Zantash Uzmi. *The Constitution of Pakistan*. 12 January 2000.
- Space and Time (Private) Limited. "Languages." *Trade Index of Pakistan*. Authorized by Chamber of Commerce & Industry. 30 April 2000.
- UNESCO: IBE. "The Development of Education in Pakistan" by Ministry of Education. Islamabad, October 1994. *World data on education: Country Report of the 44th Session of the International Conference on Education*.
- , "Pakistan." *World data on education: Profiles of national education systems*. Based on the 1996 session of International Conference on Education. Internet version. 28 June 2000.